水曜通信44

2025年
1月

東北学院宗教センター編

第79回 水曜公開礼拝
2025年1月15日（水） 18：30－19：00

＜礼拝次第＞

前　奏：ディートリヒ・ブクステフーデ作曲
「われは神より離れまじ」BuxWV220

讃美歌：39番「ひくれてよもはくらく」

聖　書：ヨハネによる福音書８章31－38節

讃美歌：121番「まぶねのなかに」

説　教：「この人を見よ」

頌　栄：539番「あめつちこぞりて」

後　奏：ディートリヒ・ブクステフーデ作曲
「われは神より離れまじ」BuxWV221

説教
東北学院榴ケ岡高等学校
宗教主任
西間木　順

奏楽・第２部演奏
礼拝オルガニスト
菅原　淑子

後奏の後、菅原淑子氏（礼拝オルガニスト）によるオルガン演奏による賛美を行います。

次回第80回水曜公開礼拝は２月19日です。

第78回 水曜公開礼拝報告（説教：川島 堅二、奏楽：今井 奈緒子）

2024年12月18日（水）　18：30－19：00

讃美歌：285番「主よみてもて」
聖　書：マタイ福音書　28章16～20節
讃美歌：312番「いつくしみふかき」
説　教：「いつまでもともにいるお方」
頌　栄：544番「あまつみたみも」

【説教要旨】

「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ福音書28：20）

これは復活したイエスが弟子たちを世界宣教に派遣する際に語った言葉である。世界のいずこに行こうとも、イエスは常にいつまでも共におられるというこの言葉に幾多の宣教師が励まされて世界宣教に赴いた。この言葉は原文（ギリシャ語）では「私（キリスト）」が強調される形で書かれている。そのニュアンスを表すと「世の終わりまでいつもあなたがたと共にいるのはこの私だ」ということになる。それは言い換えればキリスト以外の存在はそうではないということを意味している。いつ引き裂かれるかもしれないという一期一会の気持ちで日々隣人に接したいものである。　（大学宗教主任　川島 堅二）

前　奏：D. ブクステフーデ作曲「甘き喜びのうちに」BuxWV189
後　奏：J. S. バッハ作曲「かくも喜びに満てるこの日」BWV605

いよいよ来週はクリスマス、大学では先行して公開クリスマスや大学クリスマス礼拝が行われてきました。今日の前奏は、ラテン語とドイツ語が交互に歌われる中世ドイツの民謡が元になった、喜び溢れるコラール「甘き喜びのうちに」のブクステフーデによる編曲です。後奏はバッハのオルガン小曲集からクリスマスのコラール「かくも喜びに満てるこの日」の編曲。リズミカルな伴奏が御子の到来を祝します。　（オルガニスト　今井奈緒子）

礼拝とその後19時から19時30分までの今井奈緒子氏によるオルガンによる賛美に45名の方が参加されました。

礼拝後、音楽による賛美（オルガン演奏：今井 奈緒子）

1．D. ブクステフーデ作曲「テ・デウム・ラウダームス」BuxWV218
2．A. ギルマン作曲「3つのノエルによるオッフェルトワール」

《テ・デウム・ラウダームス》は5世紀初頭ミラノの司祭聖アンブロシウス作とされるラテン語のクリスマス賛歌です。M. ルターがコラールに整えました。北ドイツオルガン楽派の巨匠クステフーデは、この旋律の各行を異なる形式で多様に展開させています。19世紀フランスのギルマン作曲オッフェルトワールは、地方色豊かな3つのノエル（クリスマス民謡）を紡いでいきます。

（今井奈緒子）

― 建築が語る東北学院の歴史（35）―

キャンパスの建設や拡張、あるいは校地の売買や移転の物語は、東北学院と、学院を取り巻く社会の歴史を濃密に反映しています。ときに壮大な理念が建築家の手で造形化され、またときに多様な関係者の思惑の渦の中から、キャンパスは一つの姿形として瞬間瞬間に立ち現れます。キャンパスの空間には、そうした先人たちの営みが幾重もの層を成しています。

図１に掲載したのは、土樋キャンパスの一角でひっそりと、しかし雄弁に歴史を語る痕跡の一つです。図２は、その場所を少し引いたアングルから写したものです。

これは、現在の大学本館（旧専門部校舎, 1926, 登録有形文化財）と、その裏にある部室棟との間に在る「壁」です。広瀬川に向かって下る地形を調整するように建つ擁壁（ヨウヘキ）のモルタルの奥に、レンガ積みの壁が見えます。

図３は、その正体を示す図面です。作成されたのは大正14年（1925）頃で、その図面からは、本館の裏にかつて“BOILERROOM”が在ったことを読み取れます。

本館の建設時、土樋キャンパスには、石炭ボイラーによる低圧蒸気を熱源とする先進的な暖房設備が導入されました。ボイラー室で発生させた蒸気を各所に循環させて室内を温める暖房方式で、礼拝堂の建設後には、礼拝堂にもここから蒸気が送られました。

この設備設計者は、大正３年（1914）にドイツから招かれて来日した設備エンジニアのA. P. テーテンス。当時の先進的な事務所ビルや、関西学院（大正８）、聖心女子学院（大正13）などのミッション・スクールで設備設計を手掛けた人物として知られています。

レンガの壁。これはボイラー室で発生させた蒸気を、地下から本館に導くための配管用トンネルの痕なのです。ボイラー室自体は戦後のキャンパスの拡張過程で移転しましたが、埋められたトンネルの痕跡は、当時の先進的な校舎の記憶を今に伝えています。

（工学部　﨑山 俊雄）

図１：土樋キャンパスの一角に遺るレンガの壁

図２：大学本館と部室棟の間の擁壁

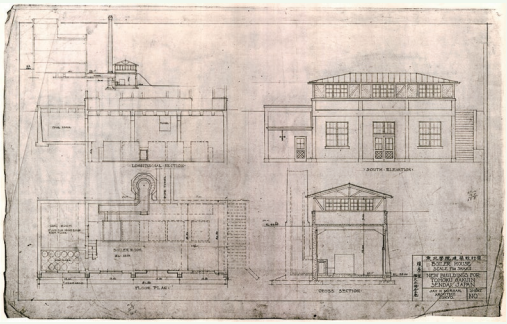

図３：ボイラー室の当初設計図
（東北学院史資料センター蔵）

旧約聖書のヘブライ語（４）（最終回）
主はそこに

エゼキエルはバビロン捕囚期に活動した預言者で、エルサレム神殿の破壊とバビロン捕囚を経験した預言者でした。エゼキエル書の40章から48章には、神殿の再建の幻が出てきますが、大変興味深いことに、ここには「エルサレム（イェルーシャーライム）」という名前がまったく出てきません。エルサレムと思しき場所は「そこに（シャーマー）」（１：１）とだけ書かれます。エゼキエルは、「名（シェム）」にこだわりがあるようで、神の「わたしの聖なる名（シェム・コドシー）」（36：22など）だけが救いの根拠です。ところで、再建された神殿が立つ町の名前は「ヤハウェ・シャーマー（主がそこに）」（48：35）でした。バビロニアの地に住まうエゼキエルにとって、エルサレムに限らず、神がおられるところこそが新しい神殿になるのです。

（大学宗教主任　田島 卓）

ごあいさつ

2024年11月より東北学院宗教センターで主事の仕事をはじめさせていただきました阿部頌栄と申します。どうぞよろしくお願いいたします。日本ナザレン教団仙台富沢教会でも牧師をしております。

学ぶ時間は人生の中でも特別な年月です。自分を変えて成長させることができる貴重な期間です。普段、大学の宗教センターの一室で学生の皆さまとお会いしていると、日々挑戦し、変わっていく姿を、そして時に羽を休めにやってくる姿を拝見します。なんと尊いことでしょう。もちろん大学だけでなく東北学院の各設置校において、キリスト教精神と宗教センターが、そんな学生の皆さまの日々を下支えできればと願っております。学生のお一人お一人が充実した学びと学校生活への神さまの祝福が豊かにあることを祈りつつ、主事としての業務に携わらせていただきます。

（宗教センター主事　阿部頌栄）

東北学院宗教センター編「水曜通信」第44号
2025年１月８日発行
発行責任者：宗教センター主任　原田 浩司
東北学院宗教センター　TEL：022-354-8310
〒984-8588　仙台市若林区清水小路３-１
Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

宗教センターHP